様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００７２６

研究課題名（和文）ロシア極東地域における日本語教育の歴史的背景と現状に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on the Historical background and current states of Japanese language education in the Russian Far East

研究代表者
竹口　智之（TAKEGUCHI, Tomoyuki）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：８０５４２６０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ロシア極東地域における日本語教育史を、インタビューを基にして分析したものである。調査対象者はユジノ・サハリンスク市、ハバロフスク市、ウラジオストク市で日本語を学習していた方たちである。この三都市で最も日本語教育の歴史を有するのはウラジオストク市であり、ユジノサハリンスク市、ハバロフスク市では80年代後半から90年代初頭にかけて日本語教育開始された。これを概観すると、極東地域の日本語教育はウラジオストク市の雛型が他の極東都市に波及したかに見える。しかし実際には、各都市間で人材の異動があり、また、各地の状況に合わせた日本語教育が実施されてきたことが窺えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本調査は、特定地域の教育史・教育政策を、研究者からの視点だけではなく、実際の教育関係者と共同で分析した。特に詳細な分析が実施できたのは、教員と元学生の心性史と社会史である。調査協力者にとっての日本語は単なる教科科目の対象ではなく、自身を自己実現させる言語であった。
　また、日本語教育史観は戦中と戦後によって大きな分断があると認識されている。しかしながら、ハバロフスク市では満洲国時代の国語教育と連続する可能性も有ることが示唆された。あわせてサハリン州の日本語教育も、日本統治時代の遺物や、1970年代から80年代まで、普段の生活で見聞きした日本語の影響が指摘された。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the history of Japanese language education in the Russian Far East, using interviews to collect primary data for analysis. The subjects of the study are people who have studied Japanese in Yuzhno-Sakhalinsk, Khabarovsk, and Vladivostok. Among these three cities, Vladivostok has the longest history of Japanese language education while the teaching of Japanese in Yuzhno-Sakhalinsk and Khabarovsk only began in the late 1980s and early 1990s. An initial assessment appears to indicate that Vladivostok City's model for Japanese language education in the Far East region has spread to other Far Eastern cities. In reality, however, there have been transfers of human resources among the cities and Japanese language education has been implemented in accordance with the individual circumstances in each region.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育史　ライフストーリー　ロシア極東地域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ロシア極東地域には天然資源開発などで日本企業が進出し、日露合弁会社も数社存在する。都市によっては東京や大阪、北海道、北陸地方と定期船・定期便があり、両国の行き来が盛んである。このようにロシア極東地域は他のロシアの都市と比較して、日本・日本語という存在を認識しやすい地域であると言える。極東地域における日本語学習機関は、2009年度時点で約 50 機関であり、同地域には 3000～4000 人の学習者がいる。だが、これまで日本語教育の当事者である現場の教師や学習者の見解は等閑視されてきた。

申請者は、2012 年 4 月から 2014 年 7 月にかけて、サハリン州で以下の調査を実施した。対象者は（1）専科として日本語を学ぶ大学生、(2）初中等教育機関で日本語を指導しているロシア人教員、(3）初中等教育機関で日本語を学習し、現在も日本語を学んでいる大学生である。これらの研究は、彼らがなぜ日本語を教え、日本語を学ぼうとしているかを当事者の内面から探ったものである。各研究結果は以下のようにまとめられる。

（1）の研究（審査付論文、竹口 2013）

・サハリンの大学生は、親族に韓国系ロシア人が多く、これらの多くは樺太時代の日本文化に触れていることが多い。こういった家庭・親族内の日本語・日本文化が、幼少時の日本語教育の基盤を形成した可能性が指摘される。

（2）の研究（学会発表済み・論文執筆段階）

・ロシア人日本語教師は現地宗教やロシアの伝統的な教育理念など、確固たる精神の拠り所を保持しながら教育活動に従事している。

・ロシア人日本語教師の教育活動は、地域や学校の状況と、教師の経験値による兼ね合いから生成されている。

（3）の研究（学会発表済み・論文執筆段階）

・小・中・高時代に日本語を学んでいた生徒の各家庭は、韓国語や中国語などの東アジア言語よりも日本語を高く評価している。

・生徒の「自ら学びたい」という意識は、現地教員との交流によって生まれている。また各学校のイベントによって、「自分はできる/できた」という肯定的な感情を育んでいる。

・生徒の「自ら学びたい」という意識は、各学校の環境や歴史に注目することが重要である。

これまでの研究をさらに発展させるべく、サハリン州で日本語学習が開始された経緯と継続を、言語政策の変遷と教育の当事者（教員・学習者）からの視点から考察したいと考えた。また、これら日本語教育の開始と継続については、他の極東地域の都市でも分析を試みた。具体的にはロシア日本語教育史で中核を担ってきたウラジオストク市と、日ソ国交回復（1954 年）当初から日本との往還があるハバロフスク市である。

２．研究の目的

ロシア極東地域における日本語教育は、ロシア全体の日本語教育を牽引する地域であるが、その再開や開始経緯の詳細は不明な点が多い。そこで本研究はロシア極東都市の各教育機関・教員・学生（「元」も含む）を訪問し、以下の点を分析する。それは、(1）当地の日本語教育は 1960 年代にいかなる経緯で開始・再開されたか、(2)現地日本語教員はいかなる状況下で日本語を教えていたか、(3)日本語教育開始・再開時の学生は、いかなる経緯で教科教育としての日本語を選択したか、(4)さらに、これらの学生はいかなる状況下で受講していたか、である。これらを分析することで、日本語が各学校教育の科目として設置された社会背景や、教育現場が当時抱いていた日本語教育観なども併せて明らかにしたいと考えた。

３．研究の方法

本研究はロシア極東地域における日本語教育史を、当事者の口述史から総合的に明らかにした。サハリン州、ハバロフスク市では、1990 年に最初の日本語科が設置された各大学の関係者にインタビューを実施し、学科設置の目的や背景を探った。ウラジオストク市については、70 年代後半当時学生だった日本語学習者にインタビューを実施した。インタビューは、大きな文脈で解釈しようとするライフ・ストーリー法に則って分析した。

４．研究成果

ウラジオストク市については、コロナ禍及び宇露戦争によって現地訪問ができず、今後継続して調査を行う必要がある。他の 2 都市の日本語教育史は以下の成果があった。

ユジノサハリンスク市については以下のようにまとめられる。(1）1980 年代中頃のサハリン州は経済的に切羽詰った状況であり、語学によって窮状を打開しようとする気概があった。(2）80 年代、大学で日本語教育が始まった際、学生の中には幼少期から日本人・日

本語・日本文化に触れていた者もいた。この日本人は当時の追憶から、ロシア語を使っていたが、彼らの生活習慣から日本語への興味を抱いた学生もいた。(3) 設立当初は外国語教育学に熟知した教員がおらず、恐らくは自身がかつて受講した英語の授業の慣行を実施していた。(4) ロシア人大学教員は 90 年代後半から今世紀初頭にかけて、教職は他の職種と比較して低待遇であった。この苦境は、学生の反応・成長を見ることによって自身の拠り所としていた。(5) 現在、サハリンで日本語を教える教員の中には、かつてサハリン州で日本語を使用した企業に一旦就業したものの、諸事情により、より低待遇である教育職に転向せざるをえなかった。

ハバロフスク市は初・中等教育機関の日本語教師と、高等教育機関の日本語教師を対象に、ライフ・ストーリー法を用いて、日本語教育史の一部を明らかにすることができた。これらの調査から、現地の日本語教師がいかに日本語を選択し、教職という仕事を選択したか、職業アイデンティティを獲得するためにいかに奮闘したかが窺えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 竹口智之，マフラコワ・アレクサンドラ	４．巻 22
２．論文標題 1960年代～90年代におけるロシア極東地域での日本語教育――『日本語母語話者教師』として活動したロシア人の生涯から――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪観光大学研究論集	６．最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹口智之	４．巻 66
２．論文標題 90年代以前のロシア・ハバロフスク市における日本語教育史――ゲオルギー・ペルミャコフ氏の生涯から――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育学研究紀要	６．最初と最後の頁 393-398
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹口智之	４．巻 63
２．論文標題 ロシア極東地域における日本語教育史 ――日本語ネイティブ教師の視点から――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 竹口智之
２．発表標題 90年代以前のロシア・ハバロフスク市における日本語教育史――ゲオルギー・ペルミャコフ氏の生涯から――
３．学会等名 中国四国教育学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
ハバロフスク日本語教師会	2020年～2020年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関